

ドイツの民俗衣装の現在

スウェン・ホルスト

Abstract

Folk costumes change during the times, taking influences from the city, adjusted them to the social environment and the social role of its wearer.

In the 19th century citizens demanded a national dress, a dress which reflexes the national spirit and the old tradition. Old costumes were restored, folk costumes were reinvented.

Overall, the 19th century saw a lot of costumes. The carnival along the river Rhine reinvented the costumes of former city guards, the carnival of the Black Forest reinvented the archaic masks of the early modern period, and in medieval cities historical events were re-enacted. Most famous is festival of a medieval wedding of the city of Landshut. All this festivals became a part of the local identity and a part of the identity of the participants.

Focusing on the Upper Bavarian county side on the feet of the Alps, this area saw a powerful revival of local folk costumes from the end of the 19th century, based on some few relicts. This movement was fostered by members of the royal family, wealthy citizens and local intelligentsia like teachers and officials. Often being an invented tradition, the members of the many preservation societies claimed that the folk costume is an unchangeable old tradition. Never the less they adjusted their societies to National Socialism of the 30th or the tourism of the 50th. The folk costume of today may be an invented tradition; however it plays an important part in the social life of today's Upper Bavarian villages.

Today a kind of Bavarian folk costume is popular not only on Munich's Oktoberfest, but also on other festivals around the country. People enjoy a second festival identity by dressing in Bavarian style clothes. This festival identity allows playing a different role, the wearers normally hesitates to do because of the daily behaviour code.

1. 序 論

グローバル化社会においてはグローバルな企業が世界中の発展途上国で衣服を生産し、あらゆる国に販売している。現代はメディアを通して最新のファッションの情報が素早く普及する時代である。最早、民族衣装の時代ではないと思われるかもしれない。19世紀後半のあるドイツの百科大事典により、流通の活発化が促進し、民族衣装は急速に姿を消しているところである¹。

しかしドイツでは数年前²から毎年行われる秋の祭りに「にわか民族衣装ブーム」が起こって

1 Brockhaus 1880, Band 14 P. 699.

2 2000年ごろから Egger, p.12.

いる。そこで、現在における伝統的な衣装・民族衣装の意義を考察してみる。

まず、衣装全体とその社会的な意義・役割を考えなければならない。牧島氏は小川氏の言葉を借用して衣装の目的を述べている。

- (1) 生理衛生上の目的（人体の防寒、防雨などのはたらきを助ける：冬服、夏服、雨服など）。
- (2) 生活活動上（活動、休養、運動、レクリエーションなどの動作を能率的にする：事務服、作業服、寝衣、ラウンジウェア、スポーツ服など）。
- (3) 標識類別上の目的（秩序を維持するために、着る人の所属を示し、職業をあらわし、階級、役目、行動を示す：制服、団体服、職業服〔軍服、警官服、消防服、学生服〕など）。
- (4) 道徳儀礼上の目的（社交親和のために、礼節を保ち、品格を示し、相手に敬意をはらい、風儀を正しくする：社交服、訪問着、儀礼服など）。
- (5) 装飾審美上の目的（趣味、好みなどについての個性を表現し、他人に対して優越を示したり注意を引いたりする：おしゃれ着、タウンウェア、リゾートウェアなど）。
- (6) 扮装擬態上の目的（別の人物に見せるために、変装、仮装、偽装する：演劇用衣裳、仮装用服飾、変装被服など）³。

その中で、牧島氏は(1)と(2)は人間が生きていく上で、必需品としてみなしている。また(3)－(6)は他人に見せるためであるという。つまり、人は衣服によって他人にある情報を発信しているのである。

ロラン・バルトは記号論の立場から衣服の発信のレベルを指摘した。

…、ここには二つの共変異があるということがすぐわかる。衣服についての変異（《裏なし》から《リバーシブル》への移行）が性格の変異（《おとなしい》から《おもしろい》への転換）を生む。逆に、性格の変異は衣服の変異を余儀なくする。あきらかにこのような構造をもつ陳述をすべて集めれば、（書かれた衣装というレベルで）ふたつの大きな入れ換えクラスの存在を想定しなければならぬことになる。一方のクラスには衣装の特徴がすべてはいるし、他方のクラスにはすべての性格的な特徴（《おとなしい》、《おもしろい》など）あるいは環境的な特徴（《晩》、《ウイーク・エンド》、《ショッピング》など）がはいる。一方のがわには形態、物質色があり、他のがわには状況、職業、状態、気分がある。あるいはもっと簡単にいうと、一方には衣服が、そして他方には世界（社校性が重要な世間）があるのだ⁴。

3 牧島、220－221ページ。小川、9ページ。

4 バルト・ロラン、36ページ。

人間は自らの社会的立場や考え、気持ちを表すために、常に自らを飾ってきた。化粧や髪形、ピアス、刺青のみならず、いうまでもなく衣装もその役割を担っている。衣装は刺青等と違って、場面に応じてすぐ取り替えることができる。衣装を通じ、特定の集団・階級所属を表現するための特徴的なスタイルを選ぶことができる。しかし同時に、衣装を通して同じ集団・階級の他のメンバーとの差別化を図ろうとする。所属と区別のこのような緊張関係からファッションが生まれる。人は競争相手である仲間の服装情報に基づいて自分の衣装を選ぶため、ファッションの存在には仲間の情報が必要である。ライバルより良いものを身に着けたいと思えば、多くの場合は上質な素材などを購入する経済力も必要である。ファッションセンスは物質的に高度なレベルでの競争となる。

民俗衣装、民族服 ethnic costume とは、人種・言語・宗教・歴史など自然的ないし文化的同質性をもつ集団の人々が着用する普遍的な衣装で、民族服をも含むより広い概念で用いられ、それが国家を形成する精神的同一民族によって着られる場合は、しばしば国民服 national costume とよばれている。これに対し民族衣装 folk costume は、民間の習俗として伝わる衣装である。一般には、非都会地域での民衆の服装で、しばしば農民服 peasant costume、郷土服 rural costume、地方服 regional costume などともいわれ、都会的な流行服つまりファッションへの対概念として使われる⁵。

一般にドイツ語で Tracht または Volkstracht と呼ばれており、民族または民衆の衣装と訳せる。Tracht (衣装) は現在、民族衣装限定で使われている言葉である⁶。実際、地方の住民は Gewand という言い方をよく使ったので、Gewand を衣装と訳せば、Tracht は扮装のための衣裳と訳すこともできる。民族または民衆の文化を求めるのはロマン主義的な発想であった。Volkslied (民謡) はより有名な例であるが、民衆の文化は、外国の影響を受けているファッションと違い、その国民の本質を表す文化であると考えられた⁷。

19世紀から20世紀上半期までゲルマニストや公務員、郷土研究家が民族衣装を掘り起し、記録に努めた。彼らは民族精神を表す18世紀に出来上がった本当の民俗衣装を追究した。民族学が自然民族を研究するのに対して、自民族を対象とする民俗学は文化民族と関わると彼らは考えた。(河野、22ページ) 民族衣装は伝統が強固な地方の風習として説明され、都会の現代化に対抗するものとして創り上げられた。これは基本的に、異文化の影響を拒否する反近代的な思想であり、民俗を血統的民族と解釈するなら、ナチス的な思想に一致するものである。

1922年に Naumann 氏すでに「沈降文化財」を論じた⁸。

5 「日本大百科全書」第22巻 564-565ページ、小学館1988年。

6 単独に「特殊な衣装」という意味があるが、他の名詞と組み合わせれば「民族衣」の意味に限定する。

7 Egger, p.16. ドイツの民俗学が衣装の伝統な要素を求めて、20世紀の60年代までファッションを研究しなかった。Bausinger 1968, p.6.

というのも、民俗衣裳とは、教養ある上層の流行衣裳を、教養のない地方の下層が、うけいれたものなのであるからだ。いわゆる民族衣裳というものは、常民の中などから生れたものでもないし、ロマン派民族学者が考えたがるように、決して、民俗性の創造的精神を示すものでもない⁹。

この発想には上層がリーダーシップを握る。このリーダーシップが古代・中世の世襲貴族から近代の精神的貴族の手に移ってきた。これはまたナチスの指導者原理に近い考えである¹⁰。民俗衣裳などに民族精神を求める流れは1950年まで続いた。東ヨーロッパから難民としてドイツに帰ったドイツ人は民族衣裳、民族踊りを通して失った故郷を保っているかのように努めた。

この民族衣裳観に対して1960年代初頭から疑問が提示されてきた。Moser氏は研究家と文化保持者による民族衣裳の発展への影響を明らかにした¹¹。つまり、民族衣裳と民族衣裳の研究には深い関係がある。民族衣裳研究者は民族衣裳を定義し、それを選出し、決定したのである。そして、このようにして出来上がった疑似的民族主義を近代の文化産業の一部として説明した。その後、アルプス山脈地帯の民族衣裳等は観光客向けの疑似伝統であるとして批判が高まった。その学説に対して、さらに批判が起こった。というのは、この学説では本物の民俗衣裳というものが存在し、それが教養市民や文化産業によって疑似の民俗衣裳になったとされているからだ。しかし、本物の固定した民俗衣裳など存在しなかったと反対派は強調した。

Bausinger氏はまた民族衣裳とファッションの距離を考察し、停滞の時期の衣裳が民族衣裳であり、流動の時期の衣裳はファッションであると説いた¹²。両者の対立関係を維持しながらその関連性を提示したので、その後の研究者はその区別さえも否定した。この説では民族衣裳はファッションの流れの中に存在するように指摘されている。その後、民族衣裳の研究は衣裳研究の中に溶け込んだ。20世紀末の衣裳研究は全体として衣裳の機能や衣裳の社会的関連と役割、衣裳の象徴的な役割を追究している¹³。民族衣裳に関して、扮装としての民族衣裳の設定のプロセス、それに関係する人と考えについての多面的な研究が確認できる。

このように民族衣裳は18世紀-20世紀前期の一つのパターンとしてみられるようになった。民族衣裳・民族風の衣裳は一時期、衰退を辿ったが、21世紀に入ると再び流行り始めた。Tschofen氏はこれらをオーストリアの再現された歴史的衣裳、民族衣裳、民族風ファッションに分類した¹⁴。Egger氏が行ったミュンヘン市のオクトーバーフェストの来客衣裳の研究が存在する。Egger氏はミュンヘン市住民の衣裳を考察する際に、絵画や写真に現れるオクトーバーフェストに来る客の衣裳を調べた。それを踏まえてEgger氏はオクトーバーフェストの観察調

8 ナウマン13ページ；河野116ページ。

9 ナウマン16ページ。

10 ナウマン13ページ。

11 Hans Moser (1962), Vom Folklorismus in unserer Zeit. in: Zeitschrift für Volkskunde. Band 58, S. 177-209.

12 Bausinger (1966).

13 Kaschuba, p.229.

14 Tschofen, Bernhard (1999), Berg Kultur Moderne. Volkskundliches aus den Alpen; Wien.

査と聞き取り調査を行った。

この論文は民衆の衣装の発展を短くまとめ、さらに日常生活から離れた民族衣装の発展に注目する。19世紀に多くの参加者が扮装する行事・祭りが発達してきたが、いくつかの事例をとおして、衣裳とアイデンティティーについて考察する。

そこで、ドイツで最も有名なバイエルン州アルプス麓の民俗衣裳に焦点を当てる。しかし19世紀から一般的な扮装傾向がみられたので、他の祭りの衣裳も参考として取り入れる。

次に民族衣装の組織化を考察する。その組織は社会の中で成長し、その影響をうけ、組織を越えて社会にも影響を与えている。ここでバイエルン州のアルプス麓の民俗衣裳保護団体を紹介し、さらに一つの村の民俗衣裳保護団体の発展と現代社会における活動を考察する。

最後に現在、祭りに来る客の間で流行っているバイエルン風民族衣裳に注目する。Egger氏のバイエルン州のミュンヘン市研究を踏まえながら、最新の動向を確認し、バイエルン州のミュンヘン市以外の地方におけるバイエルン風民族衣裳の流行にも目を向け、その衣裳の意義を考える。

2. 民衆の衣装から民衆の扮装へ

2.1. ドイツの民俗衣装の歴史

理論的な前置きはこのくらいにして、ドイツの事情に目を向けてみよう。近世、ドイツの貴族たちはフランスのファッションを身にまとった¹⁵。裕福な町人らはそれを後追いで真似たが、身分に阻まれたところもあった。一方職人たちは何か行事があると誇りをもって自分たちの職人の制服を晴れ着として着た。農民たちは年に1～2回市内の市場を訪れて町人のファッションを見物したが、実際に晴れ着を買えるのは数年、あるいは数十年に一着だけであった。「未婚の若者」、「既婚の大人」、「未亡人」という人生の3段階に合わせて晴れ着をつくった。子供服というものは存在しなかった。農民が晴れ着を身に付けるのはミサや祭り、結婚式のときであった。裕福な農家は少し早いペースで買い替え、最新のファッションを取り入れることもできたが、貧困層の農民には晴れ着を買う余裕はなかった。村内コミュニティによって人々はその社会的立場に相応しい衣装や振る舞いをするよう監視されていたため、逸脱する者は出にくかった。ファッションに目覚めた町人からすると、農民の服装は時代遅れで素朴すぎるものであった¹⁶。

近代化に伴い、農村には活気がなくなり、村内の仕来たりが崩れ始めた。村民が都会に移住したり、情報と商品が増加して田舎に流入したりした。これは二つの結果をもたらした。一つは、農民の衣装の発展が止まったことである。18世紀末ごろまで流行していたのは膝下までの

15 Bausinger (1968), p.3.

16 Egger, p.16.

半ズボンであったが、19世紀に入る頃から長ズボンが主流となった。しかしドイツの多くの地方で民族衣装は半ズボンの段階で止まっている。もう一つは農村の衣装の特徴が消滅したことである。町でも村でも裕福な人々は同じファッションを追求し、貧困者の服装も町か村かを問わず、安くて、粗末な同じような衣服となった。

2.2. 伝統的な衣装を求める

一方19世紀はノスタルジー思考の時代でもあった。近代化が急速に進んだこの時代、人々は不安を感じ、過去を回顧して昔の簡素で素朴な生活に憧れたのである。それゆえ歴史的な衣装全体への関心が高まった。

行政が政治的なパフォーマンス目的で伝統の典型と思われた衣装に目をつけた。たとえば、バイエルン王国は19世紀初頭に文化、方言、宗教の異なる地域をかきあつめて作られた王国であった。王の結婚式等では各地域代表がその地域の典型と定められた民族衣装を身につけて祝福した。王は狩猟が趣味であったが、狩りの時には丈夫で動きやすい民族衣装を身にまとい人民の前に現れた。それは民族（民衆）の一員であることをアピールする狙いもあったからだ。いままで民族衣装を軽視していた都市の上流階級も王様がお召しになるなら民族衣装に飛び付いた。このようにして農民たちは民族衣装を再認識していったのである。ただし、民族衣装の伝統がすでに途絶えていた地域も多くあった。その場合、伝統がまだ生きている地域に目を向け、資料からそれらしい民族衣装を探したり、行政が定めた民族衣装を自分たちのものにしたりした。

国民をその文化の元に統一する試みが19世紀に行われていた。1848年革命で民衆はドイツの民主的な統一を試みた。君主側はそれを制圧したが、民族の統一は支配者側にとっても無視できないテーマとなった¹⁷。こうして「民族衣装」が意識されるようになった。先に述べたとおり、統一した民族衣装は存在しなかった¹⁸。そのため、19世紀後半に流行した民族衣装が、疑似伝統であるという意識もあった¹⁹。

民族衣装ではないが、歴史的な衣裳の一つの例として、カーニバル王子の近衛隊の軍服を挙げよう。近代カーニバル²⁰は1822年にケルン市に生まれた。「カーニバル王子」は“君主”だったが、軍国主義の時代であったため、カーニバルの発案者はカーニバル王子にも近衛隊が必要だと考えた。その近衛兵の軍服に、かつて自由都市であったケルン市防衛隊の赤白の軍服を採用したのである（図版1）。ケルンの市防衛隊員たちはのきな人々であったので、きっちりし

17 これは世界中に人気な観光地であるアルプスの衣装に限定していない。西ドイツの中部の丘陵地帯サウエルランド地方のプレカーフェルトの農民射撃団でもその記述もある。上流階級の人、公職の人も19世紀に農民服で農民の前に現れた。

18 Rusche/Bakos, p.10により、オーストリアで1810-1860年の間、大公ヨハンが灰色のシュタイヤマーケ州の衣装を着、質素な衣装と質素な生活を宣言した。

19 「古の民俗の衣装は一般ファッションの遺物にすぎなく、それほど古く遡らない。」

20 カーニバルは復活祭の前の断食期間の直線の数日間の祭りである。厳しい断食の前に気を緩んで、非日常的な騒ぎとなり、舞踏会や扮装行列が行う。

すぎのプロイセン軍に飽き飽きしていたケルン市の住民は以前の市防衛隊を懐かしみ、さらにカーニバル王子の近衛隊はプロイセン軍の教練を「お尻踊り」で茶化した。その後、時代とともに毎年のカーニバルのイベントを開催する組織が分裂して、新たな近衛隊が生まれた。

さて、新しいグループはどのような軍服を選んだのであろうか。1870年にはドイツ統一に感銘を受けた市民らが青白の軍服を選んでいるが、これはプロイセンのある部隊の昔の軍服であった。また他の地域では、発案者が先例から探すのを諦めて、様々な時代からアイデアを借り、想像上の軍服を創った。カーニバルの近衛隊に入るのは中流階級以上の市民であった。衣装はそこに所属する市民にとって重要な自己表現のスタイルとなり、軍服に関する細かい規則ができた。近衛隊の美しい軍服は隊員の自慢であり、ステイタスでもあった。

ドイツ南西地方では、前近代的なカーニバルが復活した。仮面カーニバルは18～19世紀初頭にほぼ途絶えてしまったが、19世紀前半にライン地方に特徴的だったカーニバルが南西地方にも浸透し始めた。しかし19世紀後半から古の文化への関心が高まり、仮面と布地などの切れ端からできた衣装が再びカーニバルに戻った。このように祭りの衣装は時代の背景を映し出してもいる。伝統的な衣裳を身に纏う人々が組織を組んで、衣裳の変化を阻止し、伝統を守るようになる。

都市の祭りではしばしばその町の歴史が再現され、重要な時代の衣装をまとって街を練り歩くパレードが見られる。最も有名な都市祭りはランツフト（Landshut）の伯爵家の結婚式を模したものである。中世末期の盛大な結婚式が住民たちによって大掛かりに再現される²¹。これは多くの町に見られる只の時代扮装行列を超えて、町のいたるところで同時に広がる歴史再演である。

今日、ケルン市のカーニバルのパレードでは様々な衣装が見られる。ローマ人やゲルマン人、30年戦争の傭兵、黒人、アラブ人などの仮装であるが、最近はブラジルのサンバ太鼓団も人気である、とはいえ2月の寒い時期に行われるので、さすがにサンバの踊り子の衣装は無理である。近衛隊ほど衣装を統一していないグループもたくさん参加する。

祭りの主役（パレードの参加者）以外の観客たちはどうであろうか。カーニバルのパレードの場合、沿道の観客の中にも扮装している人たちが見られる。アイライナーで猫の髭を描いたり、リップスティックで頬にハートマークを付けたりする簡単なものから、カウボーイやインディアン、海賊、お姫様といった本格的な扮装もある。このような仮装により、祭りの一員となって一般の観客と踊ったり、隣の人と腕を組んで音楽に合わせて身体を左右に揺すったりし



ドイツ郵便局の切手：ケルンのカーニバルの親衛隊の「尻踊り」

出典：パブリックドメイン

21 拙論（2010）、75-77ページ。

て祭りを満喫する²²。

祭りの衣装を身にまとうと日常と違う人間になる。もちろんそれは単なる願望で、現実ではない。人間はそう簡単に「普段の自分」を捨てられないものだ。実際、海賊に扮した子供はもとの恥ずかしがり屋であろう。しかし、祭りの衣装をまとうことで常とは異なる役を演じ、日常生活ではあまり出せない自分の一面を出し、少しマイナスなイメージかもしれないが羽目を外すこともできる。

多くの人間には扮装願望がある。社会構造が緻密になる近代社会において、その願望は高まるであろう。一時的に子供の状態に戻ったり、異なるアイデンティティを試したりしたくなる。伝統的な衣装を身にまとうと、自分自身がその伝統自体を身にまとえるようになる。その願望が祭の際に実現できるのである。組織されることにより、支配者によって、掌握されやすくなる面もある。しかし、組織されても、参加者は扮装することを楽しむ。今はカーニバルの扮装がその地域の住民のアイデンティティとなっている。所属グループとその衣装が参加者のアイデンティティの一部となっているのだ。同じくランツフト市の多くの住民にとって、時代祭りは努力を惜しまない自らのアイデンティティの一部ともいえる。

3. バイエルン州アルプスの麓での民族衣装の保存活動

3.1. バイエルン州の山岳民族衣装保存協会

ここでは民俗衣装の保存を目的とする協会と彼らの活動を中心に考察する。そのために山岳民俗衣装保存協会アメラングを紹介する。民俗衣装協会はまた、ウェブサイトで詳細に歴史と活動について報告している。最後に、アメラング村で着用されている民俗衣装は、ドイツ国外でドイツの典型的な衣装とみなされている。

国家のアイデンティティを育成するために、バイエルン国王マクシミリアン2世は、民俗衣装の着用を促進した。

1855年の教科書にバイエルン王国の各地域の民族衣装が載っている²³。

1857年のある小説の中でおじいさんは自分が若かった時の長上着を着用し、孫娘はよく似合う故郷の衣装を、その恋人は灰色の短上衣、緑色の襟、カモシカの毛束と羽で飾った帽子、キュッとしたカモシカ革のズボンを着ている。若者の衣装（ここは民族衣装といわれていない）は素敵に見えるように説明されていたが、2ページ後に「エレガントな衣装で身を包んだ都市からの人」と書かれてい



ミースバッハの民俗衣装、高地バイエルン地方の今の民俗衣装の原点

出典：Aquajazz, de. wikipedia, CC-BY-SA-2.0-DE.

22 拙論、(2003)、164-167ページ。

23 Fischer, p.36, 49, 54, 62, 67.

ることから、まだ農民の衣装に対する劣等感がある²⁴。

1858年から、ミースバッハ村にドイツ国内外でツアーをしたフォークダンスグループが存在した。このグループは高地バイエルン地方の習慣や民俗衣装を世界に紹介した。1883年にバイエルンツェル村のある教師が最初の民俗衣装グループを設立して、教会の反対にも関わらず革製の半ズボン民俗衣装とすることを貫いた²⁵。

王室の方が民族衣装を着ることになった時、都会の富裕層もそれに倣って真似した。その後バイエルンで多くの民俗衣装保存協会が設立された。

民族衣装の着用はもはや一人あるいは村社会全体の風習でなくなり、保存会の民族衣装が理想的なものとなった。

3.2. キーム地区の民族衣装と風習のためのアルプス連合

キーム湖地域の山岳衣装保存運動は1884年に設立されたホヘンアシャウ村の民俗衣装協会から始まった²⁶。この民俗衣装保存協会は、バイエルン自由州で3番目に古い民俗衣装保存協会である。

20世紀初期と20年代は民族衣装保存協会設立のピークがあった。第二次世界大戦後、40年代末-50年代初頭がもう一つのピークが見られる。そのうえに高地地区にあるミースバッハ村からの広がりが分かる。

表1：バイエルン民族衣装保存協会内の5つの地区の保存会の設立年代

年 代	高地地区	キーム地区	イン川地区	フォシ地区	ドナウ地区	合 計
1880	6	1				7
1890	6	6	3			15
1900	20	6	10	2		38
1910	4	2	3	4	1	14
1920	9	6	12	8	13	48
1930	1	1	3		1	5
1940	3		6	4	8	21
1950		1	2	3	5	11
1960				1	1	2
1970				2		2
1980				3	2	5
1990						0
2000				1		1

資源：各地区のHPのデータから作成

24 Fränkel、おじいさん、孫娘と恋人の衣装の説明は6ページ、都市住民の衣装は9ページに書かれている。

25 キームガウ連合会のHPに載ったZapf, Hans: Der Bayerische Trachtenverband.

26 キームガウ連合会のHPである。

キーム地区の民族衣装と風習のためのアルプス連合が今の23の協会の連合として1926年7月25日に設立された。1927年ウンターウェッセン村でこの地区において最初の個人とグループの靴叩き踊りの競技が実施された。この競技は毎年行われるこの地区の民俗衣装の祭典において不可欠の項目となった。1934年に、キームガウアルプス協会が「統合バイエルン民族衣装連合」のメンバーとなった。1937年には、NSDAP（国家社会主義ドイツ労働者党）ミュンヘン・オーバーバイエルンの命に従って、民俗衣装協会連合がナチス党の統一組合の組織「歓喜力行団」（KDF）の配下に組み込まれた。1939年に開戦のため活動が停止した。1952以来、毎年地区連合がライテン巡礼教会「七本のリンデンでのマリア」への巡礼で戦没者を追悼している。1960年、初めてこの地区で女子の回転踊りの選手権が開催された。1964年にこの地区の歌の会、1975年にこの地区の青少年の会が導入された。この地区の民族踊りを踊る夕べは現在地区祭典中に常設されている。最後に、民謡とハウスミュージックを加えて、楽しい実践であることが協会で主張された。このことは、多数のボーカルとハウスミュージックの設立に繋がった。地区のボーカルグループや音楽グループのための「地区の唄と音楽の会」が実施される。

序論で紹介した小川氏の目的分類と考え合わせ、民俗衣装保存会の中心的な目的は（4）道徳儀礼上の目的であり、（3）装飾審美上の目的と（5）標識類別上の目的も部分的に当てはまる。伝統的な民族衣装を重んじる人もその審美を主張し、規定された共通の民族衣装により、団体の仲間意識も強い。

3.3. アメラングの山岳民族衣装保存協会

アメラング村は約3600人が住む小さな村で、キーム湖の西、バイエルン州に位置している。

敗戦や国王廃位、経済危機は村民にとって迫りくる近代化の挑であったと考えられる。その頃、村民は「伝統」に従って団結していたであろう。

1921年1月16日、駅長アロイス・シューズベックは山岳衣装保存協会「キームガウ人」を設立した²⁷。協会は上に紹介したキーム湖地域の山岳衣装保存連合の地区連合Iに加入した。1921年のイースターの月曜日に劇のパフォーマンスが行われた。民俗衣装として男性は茶色の上着、緑のベスト、白いシャツ、緑の帽子、黒いズボンまた革の半ズボン、黒い靴を着用した。一方、女性は膝下丈のスカート、薄い緑の前掛け、黒い上着、白いブラウス、金色の房が付いた低い帽子を着用した。踊る若い会員は若干異なる衣装を身に着けた。以前、農民は身分や経済力によって異なる衣装を着たが、現在の民俗衣装は以前と違って、出身地と所属団体を表現するようになっている。そして合間に地元のプラスバンドの演奏と靴叩き踊り、伝統舞踊が行われた。このイベントは、方形旗を購入するために開催された。アメラングの民俗衣装協会は翌年から他の村の民俗衣装の祭典に出演して、靴叩き踊りで受賞したこともある。1922年に方形旗が祝祷された。方形旗の名親は民俗衣装協会オーピングが務めた。1931年、アメラングの協会は地区連合から脱退した。1932年8月には、キームガウアルプス協会の第六回地区民俗衣装

27 Klautsch, p.322.

祭典にアメラングの民俗衣装協会が参加した。新しい旗のための名親は、民俗衣装協会ホヘンアシャウであった。アメラング民俗衣装協会は旗の名親になる協会と友好的関係を結び、必要なときにその支援を得ることができる。祭典委員会と祭りバンドホヘンアシャウによって前日に「故郷の夕べ」を行った。地区祭典の日曜日に神父が旗を祝祷した。祭典行列には20の民俗衣装協会のほか2つのバンドが参加した。



アメラングむらの民俗衣装
出典：筆者

1953年、民俗衣装協会アメラングの踊りのグループと音楽団がシュワルツワルトへ旅行して、一部のレストランに出演し、大きな成功を収めた。1954年と55年に協会はまたシュワルツワルトに行き、そこで体育館を借りて、毎回約600人の観客で「故郷の夕べ」を開催した。1955年には、第19回地区民俗衣装祭典を開催した。この年は協会設立35周年でもあった。朝にミサを行って、午後の祭典行列に1400人の参列者と6つの音楽隊、2台の山車が参加した。民俗衣装協会アメラングは、このような民俗衣装祭典や聖体祭、神父の最初のミサなどのイベントに積極的に参加した。また協会内で活発に活動し、舞踏会や遠足、クリスマスツリーのオークションなどを開催した。1957年に民俗衣装協会アメラングは地区の靴叩き踊りの選手権（シングル151選手とグループ15組）を開催した。しかし、60年代には、若い人々を引き付けることは困難となった。

70年代になると、若い男性がまた入会するようになった。1971年に新しい旗の祝祷と設立50周年のお祝いが行われた。サッカーグラウンドで旗を祝祷するミサが行われて、祭典行列に1400人の参列者や6つの音楽隊、いくつかの山車が参加した。70年代から、多くの若い人々が協会に参入したことにより、若者のグループが拡大した。舞踏会はもう人気がなかったので、真夏の夜祭りを開催することが決定された。そのためにステージが作られ、そこで靴叩き踊りと伝統舞踊が（800人の訪問者）行われた。1976年、初めてメイポール²⁸がアメラングに建てられた。それ以後5年ごとに、民俗衣装協会はメイポールを立てることを担当している。協会は、地域の多くの催しに協力している。1988年は村の1200年の歴史を祝う年であった。多くの文化イベントが開催された。民俗衣装協会と射撃協会、スポーツ協会が運動場で何百人用の大型テントを建てた。このテントのなかで子供部と青年部、現役部が「故郷の夕べ」に出演した。日曜日、野外ミサの後、顧問であった郡長と地区連合長が演説した。「来賓の踊り」²⁹という伝統的な踊りが久しぶりに踊られた。祭典行列に31もの民俗衣装協会や3500人、14隊の音楽隊、山車15台が参加して、10,000人の観客が集まった。協会はコミュニティホールで地区の青年会を開催した。ドイツ統一後の1992年の秋に、現役はチューリンゲンのゾンネベルク市に行き、バイエルンの「故郷の夕べ」に参加した。ハウス・ミュージック・グループを設立され、そこから1998年にブラスバンド「アメラング村の音楽」が設立された。

28 5月1日、村の中心に40mの高さの飾った柱が立てられる。

29 ドイツ語の“Heimatabend”の直訳である。故郷の伝統的な音楽や踊りを披露する催しである。多くの場合、観光客向けのイベントでもある。

1994年には、民俗衣装協会が保育園のための募金活動の一環として、コミュニティホールで無料のジョイントコンサート（Hoagascht）を開催した。その後、若者のために人気の青年ジョイントコンサートも行っている。1996年には協会設立75周年を祝った。同年、協会の若者は6つの協会の靴叩き踊りの選手権に参加した。協会設立80周年はバイエルンの言葉を使ったミサ、名親のホヘンアシャウ村の協会と「故郷の夕べ」で祝った。

当協会は現在、民俗衣装を着用する現役約100人と280人の会員がいる。民俗衣装協会は教会の祭典に参加し、コーパスクリスティ（聖体祭）の行列に参加し、夏のパーティーに出席することに加え、夏至祭のペーター火と毎年の聖ステファノの日に恒例のクリスマスツリーのオークションを行っている³⁰。

表2：山岳衣装保存協会「キームガウ人」の2013年の活動³¹

日 付	活 動	場 所
2月24日（日） 13：30	青年ジョイントコンサート	アメラング村コミュニティホール
3月16日（土） 19：00	亡くなった会員のためのミサ	アメラング村教会
20：00	総会	アメラング村レストラン
4月5日（金） 19：30	地区連合の春総会	アツィング村
5月9日（木） 08：45	地区連合のライテンへの巡礼	ウンターウエッセン村
5月12日（日）	音楽祭	セヒテナウ村
5月30日（木） 12：00	聖体祭の夏祭り	アメラング村コミュニティホール
6月7日（金） 19：00	楽しい靴叩き踊りとダンス	シュレヒング村
6月29日（土） 19：00	ペーテル炊き ³²	アメラング村
7月6日（土） 20：00	故郷の夕べ	フラーベルツハム村
7月7日（日）	民俗衣装の祭典	フラーベルツハム村
7月14日（日） 12：30	6つの協会の選手権	アシャウ村祭典ホール
7月27日（土）	地区の祭典	ウイルデンワルト村
16：00	祭典の集会	ウイルデンワルト村
20：00	地区故郷の夕べ	ウイルデンワルト村
7月28日（日） 10：00	祭典のミサ	ウイルデンワルト村
14：00	民俗衣装の行列	ウイルデンワルト村
8月31日（水） 20：00	キームガウの踊り祭	ウイルデンワルト村
8月2日（金） 19：00	地区女子回転踊り選手権	ウイルデンワルト村
8月5日（日） 09：30	地区の靴叩き踊り選手権	ウイルデンワルト村
8月10日（土） 20：00	祭	ウォルフスベルク村
8月12日（月） 19：00	祭・肉鍋	ウォルフスベルク村
9月22日（日）	民俗衣装の祭典	ローゼンハイム市
9月28/29日（土・日）	バイエルン州民俗衣装連合の会議	ライト・イム・ウィンケル村
10月18日（金） 20：00	地区秋総会	グライムハルティング村
10月25日（金） 20：00	地区の舞踏会	ヒッテンキルヘン村
10月26日（土） 20：00	幼稚園募金のためのジョイントコンサート	アメラング村コミュニティホールアメラング
12月26日（木） 20：00	クリスマスツリーオークション	アメラング村広場

30 アメラングの山岳民族衣装保存協会のHPで5ページに歴史が説明されている。

31 山岳衣装保存協会「キームガウ人」のHPによる重要な予定だけである。踊りの練習日などは載せていない。

以上の24の催しの中、10個が7月と8月の間、つまり夏休みシーズンに行われている。村同志の競争があるが、観光客を視野に入れていることは否定できない。

協会の歴史を振り返ってみることで、次の特徴が読み取れる。民俗衣装保存協会は、保守的で、社会とファッションの多くの進歩に排他的であった。多くの活動はカトリック教会と密接な関係を持っている。協会にとって仲間の象徴である纏と旗が重要である。伝統と唱えられる伝統は本来の伝統ではなく、創作されたものであり、他所から取り入れた伝統である、例えば統一された衣装やメイポールの設置、ジョイントコンサートなどを見ればわかる。協会は、町で唯一のクラブでもなく、最古のクラブでもないが、村のアイデンティティーにとって重要である。協会は、村民の社会生活である祭り・年中行事の一つの柱として他の団体と協力している。協会は音楽隊などのさらなる新興活動のための核である。住民社会の一つの支えとして社会奉仕活動も行っている。協会は地方へ来る観光客のため楽しい催しを提供し、生活が厳しかった戦後に資金を稼ぐために他の観光地での公演を務めた。この活動を通して、アメラングの民俗衣装協会はまた、バイエルン州のイメージをドイツの民俗音楽と民俗文化として普及させることに貢献した。地域の繋がりや、活動の重要な一部である。まず、互いの自己アイデンティティーの再確認のために存在する。また、相互の祭りの訪問や共同会議、共同巡礼を通じたネットワークを形成する。また相互の競争によって、活動の活性化が図られている。協会の文化と価値観を次世代に伝えるために青少年育成活動に力を入れて、遊び心のある踊りの競争を通して若者の学校以外の社交のネットワークの形成を助け、若者が大人社会に溶け込めるような枠組みも作られている³³。

4. バイエルン民族衣装と祭り

4.1. ミュンヘン市のオクトーバーフェストと民族衣装

オクトーバーフェスト（10月祭）の始まりは、1810年10月17日のバイエルン王国の皇太子の結婚式を機に町の前の芝地で開催された競馬である。その芝地は皇太子妃の名に因んで「テレジアのウィーゼ」と名付けられた。皇太子は古代ギリシア文明への憧れが強く、競馬をオリンピックのように催したので、この祭りは当時からスポーツ競技の面影が色濃かった。好評だったため、翌年再び開催されることになった。競馬の他、ボーリングなど年々、様々な遊具が増え、1818年には初めて回転木馬が設置された。また、貧民救済のための宝くじも始められた。

32 バイエルン州やオーストリアの習慣である。至点に大きな牧の山を積んで、燃やされる。他の地域に洗礼者ヨハネの記念日（6月24日）に行う。下田、34ページ。

33 筆者が、アメラングの山岳民族衣装保存協会会長にいくつかの質問をすることができた。様々な伝統的な仕来りが存在する、例えば、復活祭の前の断食の期間には公に靴叩き踊りを上演してはならない、シャモアの毛からできた男性の帽子的立派な飾りを付けることができない。若い世代を組み込まれるのは重要であると感じているので、若いメンバーを積極的に募集して、会員が参加しそうな青年に直接声をかけて誘うという。会長が協会は保守的ではないと考えて、協会が積極的に国際交流を推進すると挙げた。

1819年からはミュンヘン市が祭りの運営を引き受けるようになる。1872年、天候上の理由から祭りは9月末に前倒しされた。「10月祭」という名でありながら9月に開催されるのはこのためである。バイエルンでは、3月に醸造したビールを飲み尽くした後、新ビールのために樽を空ける目的で、10月祭は以前からしばしば開催されていた。1835年、王の銀婚式を記念して民族衣装の行列が祭りに加わった。1950年以降、これは祭りのハイライトの一つになっている。1880年からビールが、1881年からは丸焼き鶏の販売が許可されるようになった。来場者や音楽隊のスペースを確保するため、小屋から広いテントに変わったのもこのころである。現在では14の大テントと15の小テントが張られている。1910年には12000hlものビールが売られ、最も大きいテントに12000人が入った。1950年、市長がビール樽を開けて祭りを開始する風習が始まる。競馬は1869年に廃止された。

1869年からマジックなどを見せる見世物屋があり、1880年には観覧車、1906年から8メートルの滑り台、1928年からモーターバイクショーが行われている。ミュンヘンのオクトーバーフェストでは、主催者側が積極的にノスタルジックな古いアトラクションと最新のアトラクションの融合を図り、祭りの雰囲気を保つため、ビールを販売するテントでは18時まで音量を抑え、伝統的な吹奏楽器の演奏だけを流す規則を設けた。オクトーバーフェストの来場者がピークだったのは1985年で、710万人が訪れた³⁴。ミュンヘンのオクトーバーフェストへ来る客の10%が外国からきている³⁵。

では、ミュンヘンのオクトーバーフェストに訪れる人々を見てみよう。大都会であるミュンヘンでは民族衣装の伝統はほとんど絶えている。都会の若者は民族衣装を着る人を「時代遅れ」等と言って嘲笑っていた。全国からミュンヘンに引っ越してきた住民はバイエルンの民族衣装に縁遠い。しかしながら、ここ数年来、オクトーバーフェストにやって来る客の間でバイエルン風の民族衣装が多いに流行ってきている。

2004年の来客の約半分が民族衣装を着たと想定された。Egger氏の2004年の聞き取り調査により、回答者の半数が初めて民族衣装を着、40%がより長い間（数年）、ずっと民族衣装を着たことがわかった。残りの回答者は子供の時に着ていて、最近になり再び着始めた。最近から着始めた回答者の平均年齢は若かった³⁶。

最近のデータはないが、今年にまたオクトーバーフェストの衣装についての記事が見られたので、そのブームはまだ終わっていないとわかる。相変わらず、伝統に相応しくない民族風衣装が批判されている。

これらを通じて、民族衣装に対するイメージが変わった。民族衣装は日常生活からは完全と言っていいほど消えてしまっている。今日では保守派の人々はアルマーニのスーツやラルフ・ローレンのポロシャツを着ている。逆に、オルタナティブ運動の芸術家が農村の文化と民族衣装を発掘した。これにより、若者にとって民族衣装に対するマイナスイメージがなくなってきた

34 2013年、640万人、Abendzeitung 2013年10月3日の記事、2014年、630万人、Welt 2014年10月6日の記事。

35 拙論（2010）、73-75ページ。

36 Egger, p.45-46.

た。次に重要なのは衣装そのものの変化である。代表的な民族衣装のひとつである女性のドレス、ディルンドル (Dirndl) は、本来は丈夫な素材で作られ、色彩も仕立ても控えめだったが、最近は軽くて安い素材で作られて簡単に買い替えができるようになった。メーカーは昔にはなかった色でディルンドルに使い、若い女性たちのファッションセンスに訴えた。本来慎ましいものであったディルンドルは今大胆に胸元をみせるものになり、スカートも随分短く、いわばセクシーなものになった。男性の民族衣装はそれほど変化していないが、今は本格的に着なくても、民族衣装の一つのパーツ、例えば革ズボン (=レーダーホーゼン) だけを履いたりすることができるようになった。また自分のイメージで勝手にアレンジもしている。本来は白シャツを着るのが決まりであったが、若者たちはチェックのシャツの方がイメージ的に「民族的」だと勘違いし、そのような着方をしているのである。民族衣装の純粹主義者らはこのような規則違反を指摘したり、正しい民族衣装の衰退を嘆いたりしているが、若者はそれに構うことなく、自分か好む民族ファッションを成熟させている。なぜなら民族衣装は非日常的な祭りの気分を演出するものだからである。

今、3月のシュタルクビール祭に民族衣装を着用する人も増えている。これはオクトーバーフェストと似ていて、友人と仲良くなる行事である。

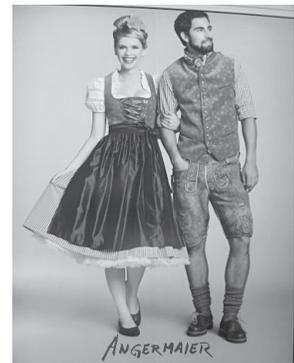
4.2. バイエルン民族衣装とドイツ全国の祭り

アルプスの民俗衣装はアルプス住民にとってアイデンティティーを支える柱である。実際、アルプスとその麓という限定した地域を越えた、遠い北ドイツや東ドイツでも着用される。

20世紀初頭にベルリン等の大都会でアルプス風の舞踏会が人気を博した。参加者が衣裳とともにアイデンティティーを変えて、日常的な仕来りを無視して、アルプスの素朴な住民のように振る舞った。日常的な礼儀の範疇を超える男女の接触ができた。参加者達は一時的な日常の仕来りからの解放感、自由を求めたのだが、そのために第2のアイデンティティーを演じたのである³⁷。

二つの大戦のあと、都市市民の間に地方への強い憧れが起こった。50年代には「故郷映画」(Heimatfilm) が流行った。都市市民は少しずつアルプスで休暇を過ごすようになる。その観光客をもてなすために民族踊りなどが上演された。映画や観光を通して、バイエルン州と民俗衣装の間に生じる連想が固定してきた。アメラングの民俗衣裳団体の活動を述べた箇所、他の観光が盛んな地方への遠征について触れた。それは民族衣裳のイメージを他の地方に伝達する役割を果たした。

観光のPRや祭りへの出演、映画により、アルプスの民俗衣装である革製の半ズボンはバイエルンの象徴となった。ミュンヘンの伝統的な衣服ではなかったが、ミュンヘンの世界的に活



ミュンヘン市、現代風の民俗衣裳の広告

出典：筆者

37 Schneider, p.223-224.

躍するサッカーチーム「バイエルン ミュンヘン」の世界中から集めた選手たちも革製の半ズボンでイベントや撮影を行っている³⁸。

多くのドイツの民衆祭り (Volksfest)³⁹ にバイエルンのテントがある。テントというのは大掛かりな移動式の飲食と音楽の会場であり、飲み屋でもある。そこでバイエルンの民俗衣装などを使用することにより、バイエルン州以外のドイツ人にとって異文化が演出される。1950年代からブレーメン市の祭りにバイエルンのテントがある。堅いと言われたブレーメン人がバイエルンの「サクバラのくつろぎ」というイメージを利用して羽目をはずして、遊んだ⁴⁰。

バイエルン風の民族衣装は今では全国に、普及している。以前はバイエルンの民族衣装がドイツの代表的衣装として外国への観光PRに使われることに多くのドイツ人が不満を持っていた。なぜならこれは自分のところの民族衣装ではなく、南ドイツ以外では民族衣装に対する意識が低かったからである。しかし今ではこのバイエルン風のオクトーバーフェストの衣装が北ドイツのブレーメン市最大の祭り「フライマルクト」(自由市場)でもよく見られるようになった。新聞がそれを話題にし⁴¹、改めて本当のブレーメン地方の民族衣装を紹介したりしている。インタビューされた女性は民族衣装のドレスが誰でも似合い、素敵かつ値段も高くないと陳述している⁴²。

ブレーメン市の伝統的なフライマルクト以外にもバイエルンの民俗衣装を着たいという要望があって、6月に「夏のウィーゼン⁴³」と題して、オクトーバーフェストの模倣を行っている。それに先駆けて、宣伝活動としてバイエルンの民俗衣装を着た男女の写真コンテストが開催されている⁴⁴。

序論で紹介した小川氏の目的分類と重ね合わせてみると、祭りで民俗ファッションに身を包んでいる人は、(3) 装飾審美上の目的を重視し、(6) 扮装擬態上の目的と(5) 標識類別上の目的も部分的に当てはまる。インタビューの回答者は揃って、民俗衣装の綺麗さを主張する。しかし祭りを楽しむ仲間の象徴としても読み取り、日常生活から一時的に脱出したい扮装願望も類推できる。

38 例えばFC Bayern München のファン・ショップHP。

39 教会の開基などの機会のできた祭りであり、参加団体や音楽隊の行列、集会場所としての大型テント、露天市場、移動式遊園地から構成する祭りである。

40 Weser-Kurier, 2012年10月26日の記事。

41 Bild, 2012年10月25日の記事。この新聞は民族衣装を着た女性の写真コンテストを開催することで、その流行を扇いでいる。

42 Bild, 2012年10月22日の記事。

43 「ウィーゼン」はミュンヘン市民のオクトーバーフェストの呼び方である。ブレーメン市でバイエルンの呼び方を使い、よりオリジナルな雰囲気をかもしだす。

44 Kreiszeitung, 2013年5月16日の記事。

5. 結 論

本来、固定した民族衣装というものは存在しなかった。19世紀の教養ある市民が国民のアイデンティティーとして民族衣装を求めた。市民は歴史的な衣装や民族衣装で自分のアイデンティティーの一部を表現できた。

バイエルン州のアルプス麓における民族衣装を中心にドイツの民俗衣装の歴史と農村での意義、大都会の祭りでの意義を考察してきた。地方であっても、その民族衣装はほぼ導入されたものと言えるものであった。わずかに残っていた民族衣装が場所によって少しアレンジされて、他の地域に広がった。

民俗衣装は伝統というイメージを醸し出しているのも、安定感とアイデンティティーを着用者に与えている。民族衣装着用者は他の着用者との間に仲間意識を分かち合うことができる。

キーム湖地域の連合は民族衣装関係の組織として長い伝統があるが、その民族衣装は基本的に19世紀後期に導入された伝統である。民族衣装保存会は伝統的な組織だと唱えながら、20世紀の歴史的变化に添って活動してきた。また戦後にはさらに活動を広げてきた。

民俗衣装の保存を目的とした組織の例としてアメラング村を選んで、その活動を見てきた。アメラングの保存会の設立は遅いので、導入された伝統と言える。選ばれた民族衣装は山岳地帯の衣装であるが、アメラングは山岳地帯から30kmも離れているため、元々その衣装を着る必要性がなかった。つまり、村外からの情報や来客が影響を及ぼしたことは確かである。それらを疑似伝統や観光客のための扮装で片づけることもできる。しかしその民族衣装の影響で村民が団結し、団結した村民が村の社会生活と地域の社交の重要な支えとなった。疑似伝統として導入されたとしても、導入以後の活動を通して、村の真の伝統になったともいえるであろう。

現在のドイツにおける民族衣装は何らかの意義があると聞いていたが、民俗衣装の二つの機能を観察できた。一つはアルプス麓の住民にとってのアイデンティティー確認という機能である。このようにアイデンティティー確認ができた人間は積極的に社会で活躍できると、保存会の活動を通してみることもできた。アルプス地方以外のバイエルン住民にとっては本当の意味で伝統的な衣服ではないが、アルプスの伝統的な衣服と親しむ機会や着る機会が多く、アイデンティティー確認という役割を完全に否定できない。他方、祭りとバイエルンの民族衣装という連想ができ、祭りにいくなら、バイエルンの民俗衣装を着るようになっていく。これらの人々にとって、バイエルンの民族衣装に扮装することで、第二のアイデンティティーを一時的に生きることができるのである。

参考文献

Bausinger, Hermann (1968): Zu den Funktionen der Mode, Tübingen, <http://nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bsz:21-opus-40357>, ダウンロード2014年10月8日。

Bausinger, Hermann (1966): Zur Kritik der Folklorismuskritik, Populus Revisus, Tuebinger Vereinigung f. Volkskunde, S. 61-75. <https://publikationen.uni-tuebingen.de/xmlui/handle/10900/47799>

- Bausinger, Hermann (1987): Volkskultur und Sozialgeschichte; in: Schieder/Sellin (Hrsg.), Sozialgeschichte in Deutschland III; Vandenhoeck & Rupprecht, Göttingen.
- Erich, Oswald; Beitzl, Richard (1974³): Wörterbuch der deutschen Volkskunde, Alfred Kröner Verlag Stuttgart.
- Dröger, Kurt Tappe, Imke (1994): Festkultur in Lippe, Waxmann, Münster.
- Döring, Alois (2007): Rheinische Bräuche durch das Jahr., Greven Verlag Köln.
- Egger, Simone (2008): Phänomen Wiesntracht • Identitätspraxen einer urbanen Gesellschaft, München.
- Fischer, Johann E. (1855): Bayern und seine Bewohner mit den Volkstrachten des Königreich: Ein Handbuch der Vaterlandskunde für Schulen und Familien, München
- Fränkel, Ferdinand (1857): Ein Königstag in den Bergen; Eine Dorfgeschichte, München.
- Kaschuba, Wolfgang (1999): Europäische Ethnologie, München.
- Klausch, Wolfgang: Amerang Schloss, Dorf, Gemeinde, Amerang 1989.
- Prahl, Hans-Werner: Soziologie der Freizeit, Schöningh Paderborn 2002
- Rusche, Thomas; Bakos, Eva (1999): Mann trägt Tracht, Lit, Münster.
http://books.google.de/books?hl=de&lr=lang_de&id=bJyKngg_tKcC&oi=fnd&pg=PA3&dq=Bayern+Tracht&ots=6H7erkj7hr&sig=Whp9B6OhQxJX3Ms32uvk-RxIA8o#v=onepage&q=Bayern%20Tracht&f=false, 閲覧2014年10月10日。
- Schneider, Franka (2011): Die temporäre Verdorfung Berlins, in Becker/Littmann/Niedbalski (Hrsg.), Die tausend Freuden der Metropole Vergügungskultur um 1900, Bielefeld,.
- Schicht, Jochen (2002): Fasnetsieber, Tübingen.
- 小川安朗 (1975) 『服飾教本』、光生館。
- 下田 淳 (2009) 『ドイツの民衆文化』 昭和堂。
- 河野 真 (2005) 『ドイツ民俗学とナチズム』 創土社。
- ハンス・ナウマン、川端豊彦訳 (1981) 『ドイツ民俗学』 岩崎美術社。
- バルト、ロラン 佐藤信夫訳 (1972) 『モードの体系』、みすず書房。
- Holst, Sven (2003) 『ドイツにおける“Verein”(団体・クラブ)の発展と意識について』 愛知県立大学 外国語学部紀要第35号。
- Holst, Sven (2010) 『祭りからイベント観光へ』 福岡女子大学文学部紀要『文芸と思想』 第74号。
- 牧島邦夫 (1995) 『衣服の科学』、東海大学出版会。
- バイエルン民族衣装協会: <http://trachtenverband-bayern.de/>、 閲覧2014年11月20日。
- ブレカークフェルトの農民射撃団: http://www.bauernschuetzen-breckerfeld.de/index.php?option=com_content&view=article&id=73:19-jahrhundert&catid=56:19-jahrhundert&Itemid=173、 閲覧2014年10月13日。
- キームガウ連合会のHPに載った Zapf, Hans: Der Bayrische Trachtenverband. <http://www.chiemgau-alpenverband.de/index.php?id=btv#pdf-464>。
- キームガウ連合会のHP <http://www.chiemgau-alpenverband.de/index.php?id=chronik>、 閲覧2013年11月25日。
- アメラングの山岳民族衣装保存協会のHP 歴史。 http://www.gtev-chiemgauviertler-amerang.de/html/seite_4.html、 閲覧2013年11月20日。
- 山岳衣装保存協会「キームガウ人」のHP による重要な予定だけである。踊りの練習日などは載せていない。 http://www.gtev-chiemgauviertler-amerang.de/html/wichtige_dog.html、 閲覧2013年11月20日。
- キームガウ連合会のHP である。 <http://www.chiemgau-alpenverband.de/index.php?id=chronik>、 閲覧2013年11月25日。
- FC Bayern München のファン・ショップ HP <http://shop.fcbayern.de/de/395/0/-fc-bayern-Trachten--/>、 閲覧2014年12月5日。

- Abendzeitung, „Wiesn-Bilanz: 6,4 Millionen Besucher und 6,7 Millionen Maß“ 2013年10月3日の記事。 <http://www.abendzeitung-muenchen.de/inhalt.oktoberfest-2013-wiesn-bilanz-6-4-millionen-besucher-und-6-7-millionen-mass.b46a83ad-7e65-415d-971e-a20c6d567352.html> 閲覧2014年10月15日。
- Bild, 2012年10月25日の記事。 <http://www.bild.de/regional/bremen/bremer-freimarkt/bild-sucht-das-schoenste-freimarkt-dirndl-26863832.bild.html>、 閲覧年2013年11月23日。
- Bild, “Hilfe, unser Freimarkt verdirndelt!” 2012年10月22日の記事。 <http://www.bild.de/regional/bremen/bremen/hilfe-unser-freimarkt-verdirndelt-26812502.bild.html>、 閲覧2013年11月23日。
- Kreiszeitung, “Mitmachen und gewinnen: „Bremer Wiesnmadl & Wiesnbub 2013“ 2013年 5月 16日の記事。 <http://www.kreiszeitung.de/events/wiesnmadel-wiesnbub-2013-fotowettbewerb-bremer-wiesnsommer-2884581.html>、 閲覧2014年10月15日。
- Welt, „Wiesn 2014 war ein Festival der Kuriositäten“ 2014年10月 6日の記事、 <http://www.welt.de/regionales/bayern/article132962144/Wiesn-2014-war-ein-Festival-der-Kuriositaeten.html>、 閲覧2014年10月15日。
- Weser-Kurier, Sander, Matthias „Warum Bremer bayerisch feiern“ 2012年 10月 26日の記事。 http://www.weser-kurier.de/bremen/vermishtes2/freimarkt_artikel,-Warum-Bremer-bayerisch-feiern-_arid,407835.html、 閲覧2014年10月15日。
- The Economist “The Lederhosen boom” 2013年 8月10日の記事。 <http://www.economist.com/news/europe/21583311-once-strictly-conservatives-traditional-dress-becoming-cool-lederhosen-boom>、 閲覧2014年10月15日。
- Baumann, Meret „Die neue Lust am Dirndl“ Neue Züricher Zeitung 2014.10.1. の記事。 <http://www.nzz.ch/aktuell/panorama/die-neue-lust-am-dirndl-1.18217898>、 閲覧2014年10月25日。